

対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン

— 初対面二者間の会話分析より —

宇佐美まゆみ・磯田 明美

【和文要旨】

本研究は初対面二者間の会話における、話題導入の頻度やその仕方などが、対話相手の年齢(社会的地位)・性によりどのように使い分けられているか、また、会話の構造、話題の展開パターンが、対話相手の組み合わせによって異なるのかを分析したものである。

主な結果は次のようなものである。

- ①目上が話題を導入して会話をリードする傾向が強く、その導入の仕方は、初対面の会話ということもあり、質問形式が多い。
 - ②すべての会話は、「導入部」「展開部」「終結部」で構成される。
 - ③個々の話題の展開は、「質問-応答型」「相互話題導入型」の2通りのタイプに分けられる。目上対目下の会話には、「質問-応答型」が多く、弾んだ会話(同性・同等など)は「相互話題導入型」が多く見られた。
- これらの結果は、日本語教育における円滑なコミュニケーションのための会話のストラテジーの指導に取り入れていくことができると思われる。

【英文要旨】

Japanese Conversational Strategies in Dyadic Conversations:

The Manner and Frequency of Topic Initiation
and the Pattern of Topic Development

Usami, Mayumi & Mineda, Akemi
(Shoba Women's University)

The present study examined Japanese conversation structure and conversational strategies in dyadic conversations between strangers. In order to examine how conversational strategies might be manipulated depending on the interlocutors' perceived power, and how conversation structure and the pattern of topic development might differ depending on the combination of the subjects, the two base subjects were asked to interact with six different partners who differ in age and sex.

The main results are as follows.

- 1) There is a tendency that the older speaker (higher power) initiated topic more frequently.
- 2) New topics are mostly introduced in question forms.
- 3) All of the conversations are consisted of "opening section," "main section" and "closing section."
- 4) There are two patterns in the manner of topic development: one is "Question and Answer Pattern" and the other is "Two-way topic initiation Pattern." The former is often found in the "power-asymmetry" conversations and the latter is found in the "power-symmetry" conversations.

These results should be integrated into the Japanese language pedagogy which emphasizes on the teaching of conversational strategies.

対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン

— 初対面二者間の会話分析より —

宇佐美まゆみ・嶺田明美

(昭和女子大学)

1. はじめに

言語教育とは、ある言語を用いた「円滑なコミュニケーション」の仕方を教えることであるという認識が最近では高まりつつある。日本語において相手との関係を良好に保つための言語行動というと、まず敬語が思い起こされる。しかし、これまでの敬語研究は、その言語形式の相手・場面などに応じた使い分けの調査に終始され、実際の言語使用における対人調節機能に焦点を当てた研究は、あまりなされてこなかったと言っても過言ではあるまい。

一方、最近の研究では、そのような狭義の、言語形式としての敬語の使用のみが円滑なコミュニケーションに関与しているのではなく、話題導入の頻度や形式・あいづち・スピーカーレベルシフト・ターンテイキングなどの、いわゆる談話レベルにおける会話のストラテジーが、対人コミュニケーションを円滑に進めるために重要な役割を果たしていることが明らかになってきている(岡田、1992; 宇佐美、1993a; 1993b; 1993c; 1994a; 1994b; 1995; 小室、1995)。

このような会話のストラテジーは、文化によって異なることが多いため、様々な文化的背景を持つ日本語学習者にとっては、その用法を体系的に指導されなければ、気づきにくい点である。このような会話のストラテジーを日本語教育の中で指導していくには、まず日本人母語話者がどのようなストラテジーを用い、使い分けているかを明らかにしていく必要がある。

本研究では、いわゆる会話のストラテジーの一つとして、初対面二者間の会話における話題導入の頻度・形式に焦点を当て、それが対話相手の年齢・社会的地位・性に依りてどのように使い分けられているかを分析すると共に、会話の流れを分析することによって、初対面二者間の会話の構造と話題展開のパターンを明らかにしようと試みた。

2. 方法

2.1 実験計画

Brown & Levinson は、“politeness”を円滑なコミュニケーションのためのストラテジーとして捉えた“politeness theory”を提唱している(Brown & Levinson, 1987)。本研究はその理論の枠を借りて計画した。すなわち、“politeness theory”で“linguistic politeness”を規定するとされる①話し手(speaker)と聞き手(hearer)の社会的距離

(social distance) ②聞き手(hearer)の話し手(speaker)に対する力(power) ③負担の度合い(ranking of impositions)のうち、初対面の二人に「学生生活・海外生活」という話題で話してもらうことによって ①社会的距離と③負担の度合いを一定に保ち、男女各

1名ずつのベースとなる被験者に、同性の「目上・同等・目下」、異性の「目上・同等・目下」に当たる相手を割り当て、それぞれ約30分間の会話、合計12会話の録音を計画した。そのうち有効データである11会話を分析した。被験者と対話相手との組み合わせは左の表1の通りである。

表1 対話相手の組み合わせ

ベースの被験者	対話者 氏名・地位・年齢・性	会話番号
北原 35歳 女性 大学院生	羽谷：大学教官：55：f	1
	河井：大学院生：38：f	2
	赤塚：大学院生：28：f	3
	高木：大学教官：39：m	4
	生田：大学院生：39：m	5
	滝川：大学院生：27：m	6
生田 39歳 男性 大学院生	田中：大学教官：50：f	7
	北原：大学院生：35：f	8
	赤塚：大学院生：28：m	9
	高木：大学教官：39：m	10
	池内：大学院生：28：m	11

- ・ 同姓は同一被験者を表す。
- ・ 会話5と8は同一会話である。
- ・ 男性同士の場合は、被験者の都合により採取できなかった。
- ・ 本研究では、実際の年齢よりも、被験者が各々の対話相手を「目上・同等・目下」のいずれと捉えるかが重要であるのでそれぞれ該当する被験者を実験者が割り当てたが、それが被験者に実際にどう捉えられていたかは、後にアンケートで確認している。

* 池内の正確な年齢は不明である。

2.2 実験手続き

男女各一名ずつのベースの被験者に対して、それぞれ同性と異性の「目上」「同等」「目下」に当たると思われる相手を実験

者が選び、二人の粗で約30分ずつ、実験者不在の状況で会話を行ってもらった。初対面二者間の会話として最も自然に近い形になるよう、実験者は被験者同士を引き合わせるまで互いの名前・年齢等を知らせず、また引き合わせた際も紹介はせず、被験者を応接室に案内し、①自己紹介の段階から録音するよう、②リラックスして自然に話すよう、③約30分経過後は、突然テープを止めるのではなく、何らかの形で会話を締めくくってから録音を止めるよう等のインストラクションを行なった後、すみやかに退出した。そのため、相手が目上かどうかなどの情報は、被験者同士が会話を進めながら探っていくことになる。各被験者が対話相手を実験者が割り当てたとおりに認識していたかどうかと、本データの自然会話としての妥当性を確認するために、会話録音終了後には、相手の年齢や地位についてどう認識したか、初対面の相手として対話者は話しやすかったかどうか、いつもと同じように自然に話せたか等について、5段階で評定してもらうフォローアップアンケートを行った(注1)。それによって、相手の年齢・地位の認識については、どの組も互いを実験者と同様に認識していたこと、かなり自然に話せたことなどを確認している。

3. 分析方法

3.1 話題導入の頻度と形式

まず、各会話のうち、初対面同士の会話の特徴がもっともでやすい冒頭の3分間を文字

化した。次に一発話ごとに、以下の三つの観点からコード化して、各々の頻度を数えた。
 ①その発話が話題を導入した発話 (INT) かそうでないか (NON) ②その発話の種類-質問 (Q)・叙述 (ST)・確認 (CO)・質問に対する答え (ANS)・あいづち (B)・言い淀み (F) 等 ③中途終了型発話 (最後まで文を言い切らない形) (注2) にマーク (INC) した。
 コード化の例は、以下の表2に記した。

表2 コード化の例

LINE	NO	話者	発 話	コード
50	37	北原	ビギナーを1年教えるってだけで、それでボストンに引っ越しになりましたのでそれで、	J-T 1:2:3
51	38	湯谷	えー。	NON:B
52	37	北原	とりあえず、とぎれてしまったんですけれど。	NON:ST:INC
53	39	湯谷	あー、残念でしたわ。	NON:ST
54	40	湯谷	色々楽しい思い出も、おありでしょう？	INT:Q

発話の途中にあいづちなどが入ってもまだ、その発話が続くことがよくある。そのため途中にあいづちが入ってもそこで発話が終わったとは考えず、あるまとまりを持った発話を一発話として数えた。従って、「表2 コード化の例」の、左側の番号はライン数を示し、右側の番号 (発話番号) はラインが2ライン以上に渡っても、一発話と数えたものには同じ番号をふってある。

3. 2 会話の構造

会話の構造を明らかにするために、11会話すべてについて、それぞれ約30分の会話を通して全話題を抜き出し、話題の流れを図示し、分類した。

3. 3 話題の展開パターン

さらに、会話のやりとりのパターンを分析するため、テーマとレーマ (Daneš, 1974; メイナード, 1993) という概念を用い、各会話の話題の展開パターンを分析した。

4. 結果

4. 1 話題導入の頻度とその形式

以下の表3に各会話における話題導入の頻度・割合と形式を示し、さらにそれを図1に示した。

4. 1. 1 年齢不均衡会話 (目上 vs 目下) の特徴

表3、図1を見ると、全体的に、対話者の性に関係なく、目上に当たる者が話題を導入

表3 話題導入の頻度と形式

表3. 1 ベース：北原 (女性)

会話番号	対話者	話題導入回数 (N)	話題導入の形式 (%)	
			質問形式	叙述形式
1 同性 目上	北原	1 (14.3)	0 (0.0)	1 (14.3)
	湯谷	5 (25.7)	5 (15.7)	0 (0.0)
	計	7 (100.0)		
2 同性 同等	北原	3 (60.0)	3 (60.0)	0 (0.0)
	湯谷	2 (40.0)	2 (40.0)	0 (0.0)
	計	5 (100.0)		
3 同性 目下	北原	6 (20.0)	7 (70.0)	1 (10.0)
	湯谷	2 (20.0)	3 (30.0)	0 (0.0)
	計	8 (100.0)		
4 異性 目上	北原	2 (22.2)	1 (16.7)	1 (16.7)
	高木	4 (44.4)	3 (50.0)	1 (16.7)
	計	6 (100.0)		
5 異性 同等	北原	4 (57.1)	3 (42.8)	1 (14.3)
	生田	3 (42.9)	2 (28.6)	1 (14.3)
	計	7 (100.0)		
6 異性 目下	北原	4 (20.0)	2 (40.0)	2 (40.0)
	高木	1 (20.0)	1 (20.0)	0 (0.0)
	計	5 (100.0)		

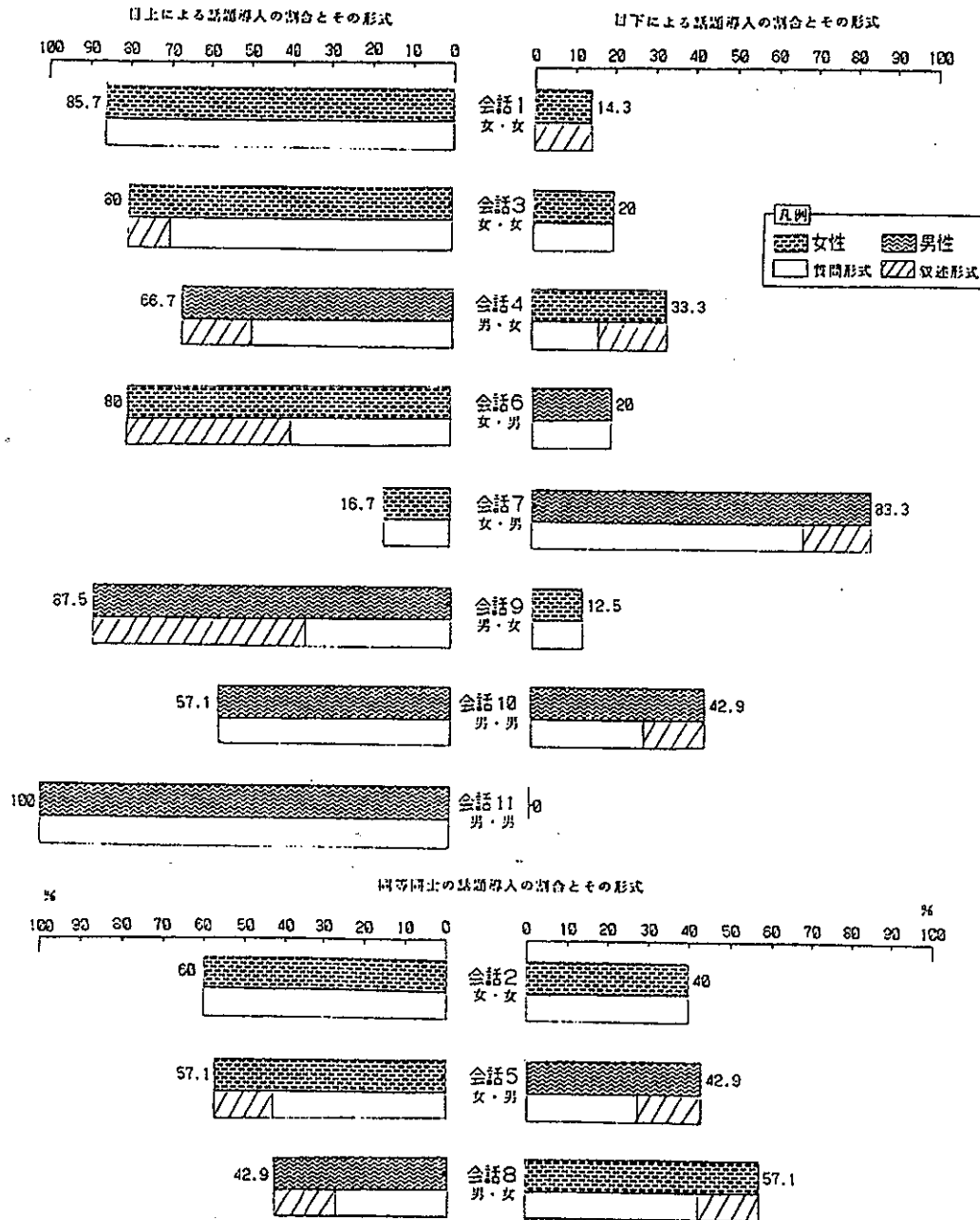
表3. 2 ベース：生田 (男性)

会話番号	対話者	話題導入回数 (N)	話題導入の形式 (%)	
			質問形式	叙述形式
7 異性 目上	生田	5 (22.2)	4 (66.6)	1 (16.7)
	田中	1 (16.7)	1 (16.7)	0 (0.0)
	計	6 (100.0)		
8 異性 同等	生田	3 (42.9)	2 (28.6)	1 (14.3)
	北原	4 (57.1)	3 (42.8)	1 (14.3)
	計	7 (100.0)		
9 異性 目下	生田	7 (87.5)	3 (37.5)	4 (50.0)
	井原	1 (12.5)	1 (12.5)	0 (0.0)
	計	8 (100.0)		
10 同性 目上	生田	3 (42.9)	2 (28.6)	1 (14.3)
	高木	4 (57.1)	4 (57.1)	0 (0.0)
	計	7 (100.0)		
11 同性 目下	生田	4 (100.0)	4 (100.0)	0 (0.0)
	高木	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	計	4 (100.0)		

する頻度が高いことがわかる。
 ベースの被験者を基準にしても、会話7を除き、対話者の年齢が上がるにつれ、ベースの被験者の話題導入の頻度が少なくなるという傾向を示している。
 初対面の女性同士の会話において、目上の話者が話題をより頻繁に導入する傾向にあることは、既に、宇佐美 (1993a, b) で報告されており、また、小林 (1993) も、S家とN家の女性の家族の「座談」の分析を行い、両家とも最年長者が「話題提起」をする割合が高く、次の世代は発話が多いが、「話題提起」は行わず、最年少者は発話数も少なく「話題提起」も行わなかったと報告している。本研究では、会話1・3・10・11の結果を見ると分かるように、同性同士の会話では、男性同士の会話も含めて、目上に当たる者が話題を導入する頻度が高いという結果を支持している。

本研究で分析した11会話中、10会話において、対話者の性に関係なく目上に当たる者の話題導入が高いという結果になったが、唯一の例外が会話7であった。会話7は異性の相手との会話で、女性が男性の目上に当たる場合である。女性が男性の目上には、会話6と7であるが、会話6では、本研究の全体的傾向と一致して、目上に当た

図1 話題導入の割合と形式



各会話のグラフの上段は話題導入の割合を表し、下段はその形式を表している。

る女性(北原)の方がより多く話題を導入しているが、会話7では、目下に当たる男性(生田)の方が話題導入の頻度が高いという結果になった。

その理由として考えられるのが「世代」の違いである。会話6の目上の女性北原は35歳、目下の男性滝川は27歳であるのに対して、会話7の目上の女性田中は、調査当時50歳で、戦中生まれである。個人的特性もあろうが、いわゆる「伝統的」なタイプの女性であり、全体的にあまり発言も少なく控えめな態度をとっている。そのため男性の生田(39歳)は、「力関係」で優位になっているためというよりも、むしろ相手に気を使って話題を導入していた感がある。生田が田中に気を使っていることは、生田の話題を導入する発話の60%が中途終了型発話(下記<例1>参照)(注2)であることや、会話録音後のフォローアップアンケートで「相手と話しやすかったかどうか」を、生田はふつうと答えているのに対して、田中は話しやすかったと答えていることなどから窺える。

<例1> 生田の中途終了型発話

生田：田中先生は客員教授で・・・？

生田：そうすると、普段は、この辺じゃなくて、えー、どちらにいらっしゃる・・・？

生田：えー、言語学の方では、どんな、というか、どういったようなところを・・・？

生田：いかがですか、半年、半年ってことは、去年、あ、今年の6月ぐらいから・・・？

以上を総合的に考察すると、戦後の高等教育を受けた人同士の初対面の会話においては、対話相手の性に関係なく、目上に当たるものがより多く話題を導入していくという傾向があるといえるのではないかと。当然ながら目下に当たる者が話題を導入することもあるが、その場合は、上で見たように中途終了型発話を用いて発話を緩和するなど、話題の導入の仕方を工夫しているということである。これについては、4.2.1「話題の導入の仕方」で詳しく述べる。

話者の性にかかわる問題については、ここでは深くは扱えないが、従来、「割り込み」「沈黙」など会話のスムーズな進行を妨げる特徴は、男性の発話に多いと言われてきた(Thorne & Henley 1975; Zimmerman & West 1975; D. スペンダー、1987等)。山崎・野井(1984)は、初対面の大学生同士でも、男性が女性の発話により多く割り込むという結果を報告しているが、その理由を、初対面の場合、「相手を理解する際、まず『男性-女性』というカテゴリーが用いられる」ためではないかと考えている。

本研究では、初対面の男女同士の会話も対象としたが、会話のスムーズな進行を妨げるような言語行動は特になかった。これは、山崎・野井(1984)が大学生を被験者としているのに対して、本研究の被験者は社会人(学生であっても、年齢が相対的に高い社会人経験者)同士の会話であることが影響していると思われる。つまり、現代の日本の文化・社会の価値観の中では、年齢や社会的地位といった要因の方が性の要因に優先し始めていると解釈できるのではないだろうか。

しかしながら、興味深いのは、男性が目上に当たり、目下の女性と話をする際である。つまり、目上かつ男性という条件が揃っている際には、従来繰り返し報告されてきた、男性対女性の会話の特徴ともいえるような傾向も見られた。以下の<例2>のように、目上の男性生田は、目下の女性赤塚に対して自分の話題を中心に会話をリードしており、しかも他の相手との会話と比べて、かなりくだけた話し方をしているのが特徴的である。

<例2>

生田：ただ、それを、じゃ、自分のね、書ける範囲というか、自分のね、プロジェクトは・・・、ちょっとイメージわかないんで、どっちの方向にもってって書こうかな、と思うとね、 NON INT/ST

赤塚：ふーん。 NON INT/B

生田：今一つなんです。NON INT/ST

生田：ぼくは実は、今、そこに、日本語の本が置いてありますけど、 INT/ST

赤塚：はい。 NON/B

生田：日本語を教えたりもしてるんですよ。NON INT/ST

赤塚：あー、そうなんですか。NON ST/CO

生田：えー、えー、えー。NON ST/ANS

生田：で、そこで、その、視覚的なものと、日本語教育と、どうつなげていかなあ、とね。NON INT/ST

赤塚：あーあ。NON INT/B

生田：そこで、書けないかなあー、と思ったりしたことあるんですよ。NON INT/ST

4. 1. 2 年齢均衡会話の特徴（同等同士）

同等同士の会話においては、対話者の性に関係なく同じぐらいの頻度で話題が導入された。

初対面の大学生男女（＝同等の男女）に行った調査（山崎・野井、1984）では、会話の「順番取り」のシステムのひとつとして、「男性は自分の順番を円滑に誘導するために『質問－応答』テクニックを用いた」という結果が出ている。ただし、この研究は「割りこみ」を中心に分析されたものであり、「質問－応答」のテクニックが具体的にどのようなかは詳述されていない。

本研究では、初対面の大人の会話であるためか、割り込みなど特に目立ったところはないが、会話5（8）で、生田（男性）が北原（女性）の会話を終了させ、自分について語る次の<例3>のような箇所もあった。

<例3>

生田：ご専門は？。←話題の導入

北原：えーっと、比較文学なんですけれども、（以下略：専門の内容を詳しく話す）
生田：ええー、（笑い）、もう、全然あれですね、分野の違うところ、よくわからないんですけど、文学は。←話題の打ち切り

生田：わたしは、えー、今、マスターコースの2年目なんです。←新しい話題の導入

北原：ええ。

4. 2 話題導入の仕方とその展開

4. 2. 1 話題導入の仕方

初対面の相手との会話であるので、会話開始の際は、当然、共通の話題がない。そのため、特に冒頭部は、質問形式での話題導入が大半を占める。その内容は、相手の職業（学生か、専攻は何か・どんな仕事をしているのか等）や、生活環境（どこに住んでいるのか等）など「当たり障りのない」情報を求めるものであり、質問者は、その回答の中の個人的情報をきっかけとして、会話を進行させようとすることが多い。質問することによって得られた個人的情報の中から、共通の事柄や興味を探り、会話を進めていくという、いわゆる「質問－応答型」の展開が多くみられた。以下の表4に会話1における話題を導入する発話を列挙してみる。

表4 会話1の話題を導入する発話

発話者	内 容	ジョー相手の反応
北 原	あの、わたくしは、まだ、学生、シカゴ大の、 実は大学院の学生で、比較文学をやっております。	ST→ BACKCHANNEL
湯 谷	去年からですか？	CQ→ ANSWER
湯 谷	あの、ご主人の都合とおっしゃいましたか？	CQ→ ANSWER
湯 谷	シカゴでは日本語を教えてらしたんですか？	CQ→ ANSWER
湯 谷	どのレベルでいらっしゃいました？	OQ→ ANSWER
湯 谷	いろいろ楽しい思い出も、おありでしょう？	OQ→ ANSWER
湯 谷	学生は何名くらいでしたか？	OQ→ ANSWER

目上対目下の会話の場合、目上に当たる話者がこのような質問形式で話題を導入することが多いが、一方目下が話題を導入する場合は、上記の北原のような自己紹介の叙述形式の他、相手の個人的情報を求めて質問する際の会話のストラテジーとして、中途終了型発話を用いることで、発話を緩和し、丁寧さを表していることが多い。（前述の<例1>・以下の<例4>参照）なお、中途終了型発話を用いるのは、話題導入時だけではないことはもちろんである。

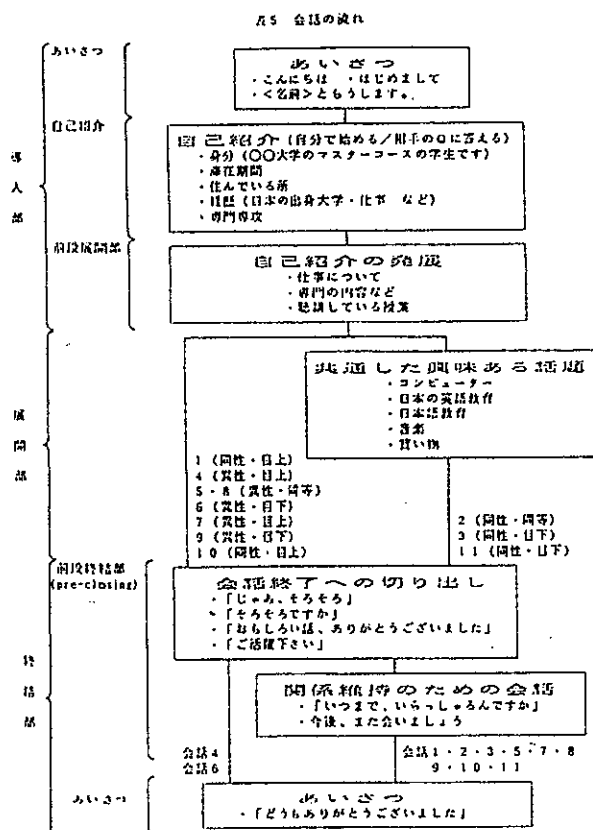
＜例 4＞

赤塚：あの、ドクターかなんか、してるん… NON INT/Q/INC (目上の北原に対して)

北原：あの、ハーバードの言語学科… NON INT/CO/INC (目上の高木に対して)

生田：じゃ、授業もいくつかあってらして… NON INT/CO/INC (目上の田中に対して)

4. 2. 2 会話の流れ



11の会話の話題はさまざまであるが、話題の展開の仕方を探るために、録音した会話約30分すべてを通して流れを分析してみると、概ね、表5「会話の流れ」のようにまとめられる。図の縦軸は、上から下へと時間の流れを表している。会話の進み方に2通りある場合は、枝分かれで示し、どの会話がどちらへ進んだかということ、を、会話番号(姓・目上/同等/目下)で表した。

表5に示したように、どの会話も大きくは『導入部』『展開部』『終結部』で構成される。細かく見ていくと、『導入部』は、さらに『あいさつ』『自己紹介』『前段展開部』の3つに分けることができる。つまり、どの会話も「こんにちは」などのあいさつで始まり、次に簡単な自己紹介がある。この自己紹介は自分から「〇〇大学の大学院生です」というように名乗るパターンと、「こちらのエ

デュケーションの学生さんですか？」等の相手からの質問に答える形で自己紹介をするパターンの2通りがある。

『導入部』の最後に当たる「前段展開部」は、自己紹介を少し発展させて、例えば自分のしている仕事の内容についてもう少し詳しく説明するというような部分になっている。この段階は、仕事などの紹介自体にポイントがあるのではなく、次に話を発展させていくためにお互いに共通の事柄や興味を探ろうとする部分になっている。そのため、次の『展開部』の準備段階になっているという意味で「前段展開部」と名付けた。

次の『展開部』では、前段展開部において、興味ある共通の話題(コンピュータや日本の英語教育についてなど)が見つかった場合は、その話題に関して一步進んだ内容で、会話が掘り下げられていく。それぞれの意見や考えなどが交換され、少し深まった会話が展開される。共通の話題が見つからなかった組は、自己紹介の延長(「前段展開部：自己紹介の発展部分」)の続きのような内容が、主に「質問-応答型」で進んでいく。初対面の会話ということもあり、11会話の中で、共通の話題が見つかったのは、会話2、3、11の3会話だけで、いずれも同性同士の会話であった。被験者数が充分とは言えないため今後の検討の余地はあるが、初対面の場合、同性同士の方が互いの心的距離が近いのか、同性同士の組の方が共通の話題を見つけて、いわゆる弾んだ会話になりやすいという傾向が見られた。また、共通の話題を見つけた組をベースの被験者を基準に見てみると、いずれも同性の目下か同等の会話に当たり、ベースの被験者がリラックスしていることや二者間の年齢の近さなども影響していると思われる。

会話の最後は『終結部』である。これも「前段終結部」と「あいさつ」の2つに大きく分けられる。「前段終結部」は、さらに、「会話終了への切り出し」と「関係維持のための会話」の2つに分けることができる。どの会話においても終結の前段階として、まず「会話終了への切り出し」がなされる。「切り出し」が、目上から行われる場合は、「じゃあ、そろそろ」というような直接的なことばであったり、「あの、じゃあ、がんばってください」というような激励のことばであるのに対し、目下からの場合は「あの、今日はどうもありがとうございました」というようなお礼のことばであることがほとんどである。

次の段階は、「関係維持のための会話」を通して「あいさつ」へと進むタイプと、「関係維持のための会話」がないものの2つのパターンに分かれた。

「関係維持のための会話」とは、会話終了への切り出しがなされたにもかかわらず、さらに「アメリカにはいつまで滞在するんですって？」というような、展開部ですでに話された内容を確認するようなものであったり、「また会いましょう」のように今後の約束をするような発話である。この場合、形式上は確認・約束ではあるが、実際に「いつまでアメリカにいるのか」という情報を求めて確認したり、実際に会う約束をしようというのではない。また、ここからさらに新しい話題作りをして、会話を展開させようとするものでもない。ただ、このような発話をして、あっさりとお話を終えないことによって、ある意味で、なごりを惜しんでいることを表しているのだと考えられる。つまり、「互いの関係維持」を形式的にせよ、表明しているのである。

岡本(1991)は、Shegloff & Sacks(1973)などを参考に電話の会話の終結について論じているが、その中で、終結部「Closing Section」は「Pre-closing」と「Leave-taking」から構成されるとしている。「Pre-closing」は「今まで進行していた会話を中断する働きのあるもの」(「じゃあ、そういうことで」など総括の表現でこれ以上の会話の必要のないことを示す・内容のまとめ・結論・行動の確認・会話の調子を整える等)とし、これによって会話終結への合図がなされるものである。「Leave-taking」は「お互いの関係の再

肯定のためのいとまごいの機能が明らかなもの（将来における再接触の約束・感謝や詫びの表明・伝言・わかれのことば）」とし、これによって会話が終結されるとしている。これらはいつもこの順番で現れるわけではなく、多種多様の形で組み合わせられて、最終的にClosingが完結される。

本研究では「総括の表現によって会話の必要のない事を示す」部分を「会話終結の切り出し」とし、それ以外の名残を惜しむような「話題の呼び戻し・再接触の約束」などは「関係維持のための会話」とした。この順番は、いつも同じではなく、また、その会話の長さもまちまちであったが、この部分は、円滑なコミュニケーションのためのストラテジーとしてのpolitenessに関わるポイントとなろう。「関係維持のための会話」は本研究の11会話中、9会話でなされた。

もう1つのタイプは、「会話終了への切り出し」の後、あっさりと「どうもありがとうございました」と締めくくってしまうパターンであるが、これは、11会話中2会話のみであった。

4. 2. 3 話題の展開パターン

Danes(1974)は、談話レベルにおけるテーマ(theme)とレーマ(rheme)の要素を抽出し、その連結関係に焦点を当てた。つまり、この連結関係が談話の結束性にも結びつく一種の内部構造設定の役目を果たしているとしたのである。メイナード(1993)も、テーマが談話でどのように進展するかを追っていくことによって異なった談話構造を確認できるとしている。

本研究でも、話題の展開パターンを分析することによって、初対面二者間の会話の構造を探るために、談話レベルにおけるテーマとレーマを抽出し、その連結関係に注目して分析した。その結果、初対面の二者間の会話のやりとりにおける話題の展開の仕方には、主に以下の2つのパターンがあることが分かった。それぞれのパターンを図示したものを、以下の図2に示す。

図2に示したように、一つは(1)「質問-応答型」とも言えるものである。話者Aが質問形式で話題を導入し、話者Bがそれに答える。AはBの答えを受けて再び新しい話題を導入するというパターンである。これは、主に目上と目下の会話に頻繁に現れた。例えば、会話1で、目上の湯谷が質問することによって新しい話題(シカゴで日本語を教えたのか)を導入すると、北原はそれに答え(1年教えていた)、さらに湯谷は北原の「教えていた」という答えを受け、そこからさらに新しい話題(どのレベルか)を質問形式で導入している。

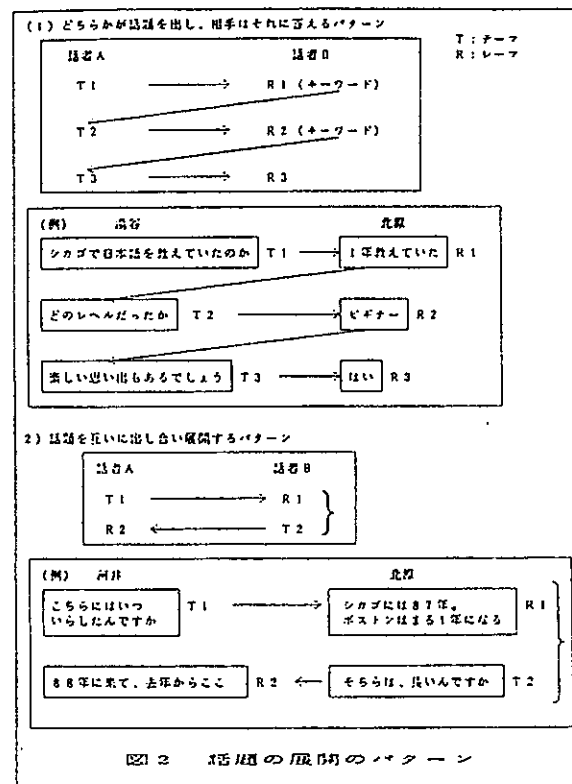
もう一つは(2)「相互話題導入型」とも言えるもので、話者AとBが互いに話題を導入しあうものである。Aが話題を導入し、Bはそれに答えた後、それに関連した新しい話題を添えるというパターンである。例えば、会話9の女性の同僚同士の北原と河井の例のような会話である。河井の質問による話題導入に(こちらにいつきたか)北原が答えた後、

今度は北原の方が、同様の質問を河井にするというような形である。

展開部の中で、(1)の「質問-応答型」のようなパターンは、前段展開部で共通の話題が見つからなかった組によく見られ、共通した興味ある話題が見つかった組は、(2)の「相互話題導入型」のようなパターンになった。共通した興味ある話題については、お

互いの意見が交換される形になるため、どちらかが一方的に話題を出すのではなく、それぞれが新しい話題を出し合うことによって会話を進行させているといえよう。

水谷(1983:1993)は、会話の進め方に関して、あいづちにより話の流れをすすめ、促したり、話し手と聞き手の二人がかりで会話を完成させたりして、話し手と聞き手の明確な区別がなくなったような話し方を「共話」、「二人の話し手がそれぞれ自分の発話を完結させてから相手の話を聞く形で、二者間で問い、答える



というような話し方」を「対話」と呼び、日本語の話し合いには、共話の形態をとるものがかなりの割合を占めると述べている。

本研究の(1)の「質問-応答型」は、水谷の言う「対話型」にはほぼ相当すると思われ、日本語の会話には多くないとされているが、初対面二者間の会話というふうに場面を絞って見ると、この対話型とも言えるものが多かった。ただ、初対面同士で目上と目下の場合、会話は、形式上は「対話型」で展開していくが、それは二人の話し手が交互に自分の意見を述べる発話を完結させていくという形ではなく、目上が質問を出し、目下が答えていくと

いうように、目上と目下がそれぞれの役割意識を担うという形になっているものが多かった。つまり、日本文化の中にまだ根深くある「年齢」に応じた役割というものが、会話にも反映されており、その例が話題導入の頻度や形式、また、その展開パターンの違いに表れていると言えるのではないだろうか。

以上、会話の流れと話題の展開パターンを見てきた。会話がスムーズに流れるためには、冒頭で述べたように円滑なコミュニケーションのための戦略が必要で、そのためには単なる言語形式のみの丁寧さだけでなく、相手や状況に応じた適切な言語行動をすることが重要である。初対面二者間の会話においては、目上に当たる者が話題を導入していくことによって、会話をリードするという役割を果たしていることが明らかになった。しかし、目上の者は自分中心の話題を導入するのではなく、目下の答えに関連づけて次の質問をし、目下に発話の機会を与えながら会話をリードをしていくという配慮が見られた。一方同等同士では、双方が互いに協力して話題を導入しあうという役割認識がなされていたと言える。

5. おわりに

本研究では、初対面二者間の会話において、「話題導入の頻度や形式」、「話題の展開パターン」「会話の構造」を明らかにすることによって、各話者が円滑なコミュニケーションのためにどのような会話の戦略を用いているのか、またそれが対話相手の年齢・社会的地位・性によってどのように使い分けられているかということと、対話相手に応じて、話題の展開パターンがどのように変わっていくのか、またそれが全体の会話の構造にいかに関与するのかについて、分析・考察した。

円滑なコミュニケーションのためには、会話をする者同士が共通の社会規範、役割意識に基づき、それぞれがその規範を守り、それぞれの役割を果たすことが重要である。会話の戦略は、そういう社会規範、役割意識を反映するものであり、いつ・誰に対しても同じ戦略を用いるのではなく、相手や場面に応じて使い分けられるものである。このことは、日本人母語話者にとっては、暗黙の了解になっていて、特に意識されないうまに行われていることが多い。しかし、日本語学習者にとっては、体系的に指導されなければ気づきにくい点であり、この相手に応じた会話の戦略（話題の展開パターンなども含む）の使い分けがうまくなされていないために、日本人とのコミュニケーションが円滑に進まないことも多い（岡田、1992）。

今後も、本研究の結果をさらに発展させて、会話の戦略を広く捉え、円滑なコミュニケーションのための会話の戦略の一つとしての、選択された話題の内容や話題導入時のメタ言語行動などに関する基礎的研究を行っていきたい。

注1) より詳しい実験手続きについては、宇佐美(1993b, 1994)を、また、具体的インストラクション、質問紙の具体的内容については、Usami(1994)を参照されたい。

注2) 例えば「お仕事は何をなさっているんですか」というところを、「お仕事は何を…」のように、文末まで言い切らない発話を「中途終了型発話」と呼ぶことにした。中途終了型発話には次のような例がある。

A1「いつごろこちらに…」→「来たのか」等がない

A2「田中先生は客員教授で…」→「いらっしゃいますか(ですか)」等がない

B1「それじゃ、お二人でこの辺で?」→「住んでいるのか」等がない

B2「ですから、87年。」→「にきた」等がない

A1・A2は、文末がだんだん消え入るような、遠慮がちなイントネーションであるのに対し、B1・B2ははっきりと言い切るような文末イントネーションである。Aのような発話が、目上対目下の会話で、目下から目上に向かっての発話に多く聞かれ、Bの方は反対に同等同士の会話や目上が目下に向かっての発話多く聞かれた。丁寧さを表す戦略としての中途終了型発話はAのようなものであるといえよう。

付記：この論文は、1994(平成6)年10月9日の日本語教育学会秋季大会で口頭発表したものに加筆・修正を施したものである。

【引用文献】

一邦文論文一

- 岡田安代(1992)「コミュニケーション能力開発のための談話分析と教育—会話の進め方の型に関する視点の導入について—」『研究叢書120 日本語論1 言語学とその周辺』、227-237 和泉書院
- 宇佐美まゆみ(1993a)「初対面二者間の会話の構造と話者による会話の戦略：話者間の力関係による相違—日本語の場合—」『ヒューマンコミュニケーション研究』第21号、25-40 日本コミュニケーション学会
- ……………(1993b)「初対面二者間会話における会話の戦略の分析：対話相手に応じた使い分けという観点から」『学苑』第647号、37-47 昭和女子大学近代文化研究所
- ……………(1993c)「談話レベルから見た“politeness”：“politeness theory”の普遍理論確立のために」『ことば』14号、20-29 現代日本語研究会
- ……………(1994a)「言語行動における“politeness”の日米比較：談話レベルにおける“politeness”の普遍理論確立への模索」『スピーチ・コミュニケーション教育』第7号、30-41 日本コミュニケーション学会
- ……………(1994b)「性差か力(power)の差か：初対面二者間の会話における話題導

- 入の頻度と形式の分析より」『ことば』15号、53-69 現代日本語研究会
- (1995) 「談話レベルから見た敬語使用：スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『学苑』第662号、27-42 昭和女子大学近代文化研究所
- 小室郁子 (1995) 「“Discussion”におけるturn-taking -実感の把握と指導の重要性-」『日本語教育』第85号、53-64
- 泉子・K・ノット (1993) 「会話分析」『会話分析』、23-61 くろしお出版
- 小林美恵子 (1993) 「座談における話題の転換」『ことば』第14号、102-121、現代日本語研究会
- 山崎敬一・好井裕明 (1984) 「会話の順番取りシステム -エスノメソドロジーへの招待-」『月刊言語』vol.13 no.7、86-94、大修館書店
- D. スペンダー著、れいのるず・秋葉かつえ訳 (1987) 『ことばは男が支配する-言語と性差-』、69-87、勁草書房
- J. コーツ著、吉川正治訳 (1990) 『女と男とことば -女性語の社会言語学的研究法-』、110-115、研究社出版
- 岡本能里子「会話終結の談話分析」(1991)『東京国際大学論叢 商学部編』第44号：117-133
- 水谷信子 (1983) 「あいづちと応答」『話しことばの表現』、37-44 筑摩書房
- (1993) 「『共話』から『対話』へ」『日本語学』vol.12 no.4、4-10

- 英文論文 -

- Daneš, F. (1974) Functional sentence perspective and the organization of the text. In František Daneš (ed.) papers in Functional Sentence Perspective. Prague : Academic Publishing House of the Czechoslovak Academy of Science, 106-128
- Thorne, B. & Henley, N. (1975) Difference and dominance : An overview of language, gender and society. In Thorne, B. & Henley, N. (eds.) Language and sex : Difference and dominance. Newbury House, 5-42.
- Zimmerman, D. & West, C. (1975) Sex roles, interruptions and silences in conversation. In Thorne, B. & Henley, N. (eds.) Language and sex : Difference and dominance. Newbury House, 105-129.
- Sacks, H. E. A. Schegloff and G. Jefferson (1974) A Simplest systematics for the organization of turn taking for conversation. Language 50-4
- Brown, P. & Levinson, S. (1987) Politeness: Some universal in language usage. Cambridge University Press.
- Usami, M. (1994) "Politeness and Japanese Conversation Strategy" Qualifying paper submitted to Harvard University, Graduate School of Education.

宇佐美まゆみ・嶺田明美(1995)「対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン：初対面二者間の会話分析より」、『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』2、名古屋学院大学留学生別科(日本研究プログラム): 130-145. 16頁. 1995年.